

第1章 佐伯区に伝わる「あまんじゃく伝説」

【あらすじ】

“むかしむかし海老山の西側に、湯蓋道空・道西という漁師の夫婦がいた。家の側に湯が湧き出る所があるので姓を湯蓋としたといわれている。

日ごろ、巖島明神を敬い日ごとに捕れた魚をお供えしていたが、その真心が通じたのであろう。ある日、漁に出ると道空夫婦の船は金の砂の上をいく。不思議に思いながらその砂を船にくみ入れると、間違いもなく金だったので、大金持になることができた。信心深く心の優しい二人は誰からも敬われた。

夫婦の間に目に入れても痛くないほどかわいがった道裕という子がいた。道裕は両親とちがい大変な変わり者だった。道空さんが、「今日ほうみやあ静かなのう。舟を出して魚を釣ろうや。」というとき、道裕は、「わしゃあ、山にいて鳥を射った方がええ。」と、身支度し弓矢を持って山に向う。道空さんが「道裕や、山へいって薪う拾うて来てくれんかい。」というとき、道裕は、「わしゃあ、ちょっくら貝を掘って来う。」とさっさと、海にいてしまった。

道裕はこんな調子で、何をするにも反対しないと気がすまない。里の人々はこうした道裕を「あまんじゃく」とあだ名を付けて呼んだ。

ところが父の道空さんが年をとり病気で死ぬ前のことである。息子の道裕を枕元に呼んで、「わしが死んだらほう、あの海の中にある津久根島へ墓を立てて葬っておくれ。これがわしの最後のお願ひじゃ。」と、いいのこした。

道空さんの本心は、海老山に墓を建ててほしいと思ったのだが、親の反対ばかりしてきた子であるから、海の中の島と言えは反対に山に葬るだろうと考えたからである。ところが父の遺言を聞いた道裕は、「自分は今まで親にさかろうてばかりおったが、せめてお父っあんの最後の願ひだけは聞き届けて差し上げんにゃあいけまあ。」と思い、父のなきがらを船にのせ津久根島に渡り、手厚く葬って墓を建てた。その墓はある年の暴風雨で海中にころがり落ちた。すると近くの海ではすっかり魚が捕れなくなった。人々は遺族の人と相談して新しい墓を津久根島に建てた。するとともどおり魚がたくさん捕れるようになった。

今でも、親のいうことに反対する子を「あまんじゃく」と呼んでいる。“

(『五日市町誌(下巻)』.五日市町誌編集委員会.(昭和58年).328-329頁より引用)

【解説・コメント】

1 広島市佐伯区の「あまんじゃく伝説」には、「海老山」、「巖島明神」((注) 巖島神社のこと)、「津久根島」(下記写真)などの地名が登場します。

いつ頃の話なのかは「むかしむかし」ということで不明です。しかし、登場人物は、湯蓋道空・道西夫婦、子の道裕と明らかです。かつて、当地にその者らが住んで生活していたと推測させるものであり、当地に根ざした話が伝承してきたといえます。

2 話の大筋は、

- ① 海老山の西側に信心深い夫婦が住んでおり、周りの者から敬われていた。
- ② ただ、その子どもは大変な変わり者で、親の言うことの反対ばかりをしていた。
- ③ 親は、死に際に、子どもの天邪鬼な性格を読んで、葬ってほしい場所(海老山)とは反対の場所(津久根島)を子どもに伝えた。
- ④ しかし、子どもは親の最期^{さいご}を目の当たりにして改心し、親の最期の願いを素直に聞くことにしたため、結局、親の希望は叶わなかった。
- ⑤ その後、津久根島の墓は暴風雨で海に転がり落ち、その後、魚が捕れなくなったが、島に墓を再建したところ、元どおり魚が捕れるようになった。

というものです。

起承転結がはっきりとした、わかりやすい話の構成になっており、また、その後の話もあり、余韻を引きます。

3 また、当時の庶民の巖島神社に対する信仰心、瀬戸内海での漁業の盛んさ、金の価値、さらには先祖の墓を大事にする素朴な気持ちなどを窺い知ることができるものです。



津久根島(広島市佐伯区の中で唯一の島)